

大学教育はどこへ行こうとしているのか

山崎龍明

(仏教文化研究所所長)

今、巻頭言執筆にあたりさまざまな思いが去来している。

仏教と仏教学の今日的課題。濁世といわれる時代の中の人間の問題。戦争、平和、環境、貧困、差別等々の諸問題。九年連続三万人を超えた自死者の問題、これらに対して仏教の果たすべき役割はどのようなものなのか、当面の課題は山積している。

しかし私が今ここで取り上げる問題は、右のいづれでもなく、「大学教育はどこへ行こうとしているのか」という問題である。あえてこの問題を取り上げる理由は、大学が大学そのものを見失っているのではないかと、という危惧が私自身の中で近年、ますます増幅しているからである。

「学問研究を試み、人間教育を施す場」というのは「今は昔」となってしまった。時に「研究はいらぬ、教育に専念して欲しい」と言われることもある。しかも、ここで言われている教育とは、著名な企業に就職させるための教育指導であるといっても過言ではない。

大方の学生も保護者もそのことを欲している。したがってその希望を叶えてくれる大学がよい大学なのである。大学も必至にそのニーズに応えるために邁進する。ある学生が「仏教など勉強して何の役に立ちますか。資格を取る勉強をした方がいい」と言った。それが役に立つか立たないか。それは、いかに効率のいい学校経営をするかと考える大学と同一線上にある問いである。大学のかかえる闇はますます深くなる、そこは人間を育てる場ではなくなっていく。

大学の危機が叫ばれて久しい。しかしそれは大学「経営」の危機である。少子化社会における大学存続の危殆である。従って何とか生き残るためのサバイバルが展開される。

大学が学生を選ぶ時代から、学生が好みによって大学を選ぶ時代となった。学生が喜ぶような、交通至便な土地への移転。ハーフのゴルフコースの設置。自動車学校を併設して免許取得の便宜をはかる大学等枚挙に遑がない。私はこれらの経営努力をただ軽蔑しているのではない。涙ぐましい努力に心が痛むことさえある。しかし敢えて言えば、大学は大学のためにはない、ということである。極端な言い方をすれば、大学はその大学の卒業生のためのもので、教職員のためのもでもない。その存在を必要とするような人間のためのものでなければならぬと言ふことである。

それが必要としない大学はその存在を否定されても仕方がないといえよう。かつて大宅荘一は、雨後の筍のごとく乱立した大学を評して「駅弁大学」と言った。それが、今日淘汰される時代になったのである。「貧すれば鈍す」という語がある。私が大学問題を考えるとき、常に脳裏に去来する言葉である。私は決して綺麗ごとを言っているのではない。「貧しても」鈍することのない道が必ずある筈である。その道を模索しよりの確かな方途を求めることが大学人の責務というものではないだろうか。それは、意外にも脚下にあることもある。十年前の本学のキャンパスは素晴らしく美しいものであった。今はどうか。もう少し内に目を向けることも肝要である。

行き先向こうばかりを見て、足元をみぬは踏みかぶるなりという金言もある。